

映画とインテリア No.6 今井 俊夫

今回ご紹介するのは、おそらく日本映画史にその名を遺すであろうアニメーション作品「この世界の片隅に」(2016年/日本)。原作(漫画):こうの史代/脚本・監督:片瀝須直/音楽:コトリング/主演(声):のん です。

昭和19年(1944年)に18歳で広島から軍港のまち呉の山手にある北條家に嫁いだ主人公すず。「ただでさえ ぼーっとしている」(本人談)彼女が、戦争による様々な困難と、まさに死と隣り合わせの運命に翻弄されながら、ひたむきに「生きる」姿が淡々と描かれています。大切な人を失い悲しみのどん底にあっても現実を受け止め、この世界の片隅に自分の居場所を見つけてつつましく生活する主人公に、のん(の声)が乗り移り、コトリングの音楽がオーバーラップして思わず琴線に触れます。



【映画】畳が四ツ井(不祝儀)敷き

日本のアニメといえば宮崎駿ですが、「この世界の片隅に」は、宮崎路線の延長ではありません。むしろそれを否定し、制作しているところが見所です。つまり、アニメだからと言って空想で世界観を補うのではなく、絵で表現するアニメーションの長所を生かして、写実映画で表現出来ないほど、とことんリアリティを追求しています。

戦時下に市井の人がどのような生活をしていたか。片瀝は、(伝聞ではなく)徹底的に一次資料(事実)を調べ、現場に足繁く通い、リアリズムに徹して絵コンテを起こし、丁寧に描きます。実写映画でもそこまで生活文化や時代の考証はしないかもしれませんが、片瀝がどれほど事実資料にこだわったか、興味のある方は、インターネットで片瀝のコラム「すずさんの日々とともに」を検索下さい。その片鱗が見られます。

さて、インテリアに関していえば、...。私は、畳の敷き方に注目しました。北條周作とすずが祝言を上げる質素な北條家自宅の仏間。その畳の敷き方は「四ツ井



【不祝儀】敷き」になっています。普通、住宅の座敷は「祝儀敷き」と言われる畳の合わせ目がT字になり十字に交わらないように敷きます。原作では祝儀敷きになっていますが、なぜか「床さし」に



なっています。(※原作画参照)。

片瀝がこだわって原作の絵を四ツ井敷きに変えました。この理由は、本人曰く、仏間なのでそうしたそうです。さりげなく、原作の違和感をひと捻りして解消しています。

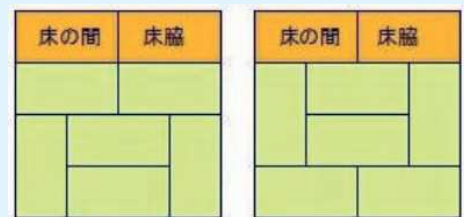
ちなみに、床さしとは、畳へりが床の間にささる(直角になる)ことを言い、昔から『不吉』とされ禁忌されてきました。近世の武士社会で刺される名残りでしょう。

四ツ井敷きは、寺院や旅館等の大広間にもよく用いられます。理由は、20畳以上は祝儀敷きで施工し難いためです。

暫くDVDと原作本を事務局に預けますので、興味のある方は、是非ご覧下さい。



【原作】畳へりが床さし ©こうの史代



正

誤



大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>

E-mail ois@jp-interior.or.jp

facebook 「大阪府インテリア設計士協会」

4・7・10・1月 4回/年発行

発行人: 河野 洋二

編集: OIS 第1事業部会

with コロナ No.113

インテリア設計士 検定試験報告

コロナ禍の影響で、3か月遅れとなった第60回インテリア設計士資格検定試験。全国受験者は613人、合格者は478人であった。その内大阪は67人が受験し58人の合格であった。資格登録者には証書、ピンバッジ、資格登録カード、記念品が贈られた。

このような状況で、証書伝達式は残念ながら中止された。

第12回 篆刻教室体験記

12月8日、一年ぶりの篆刻教室に参加しました。刻字は、去年「大吉」、今年は「遊」にしました。遊の字は、神様が旗竿を持って自由気ままに旅をしているような様子を表しているそうです。宮後先生にデザインして頂きましたが、彫り出してから刀が滑ってしまい大事な部分が無くなりました…。動揺しながら、彫り進めていきましたが、もはや字には見え早々に先生に手直しをお願いしました。

宮後先生は、今まで約1万人の名前を彫られたそうです。今年は、ソーシャルディスタンスを保った座席でしたが、先生が石に彫られる様子を本当はもっと真近で見たかったです。

アットホームな雰囲気の中、参加の皆さんの力作を見せていた



川野さんの作品「遊」

HASHIRIGAKI

葉知利書



2021年初詣

今年の新年会は、お初天神で1月9日に参拝のみ行いました。コロナ禍のため積極的な参加は求めず、7人でのお詣りです。拝殿でOISの発展と会員皆様の活躍と健康を祈念するお祓いを受けました。今年は、柏手は打たない、お神酒は紙コップで用意されているなど、神社の方でもコロナ対策が実施されていました。

一步一步着実に 会長 河野 洋二

昨年からのコロナ禍で生活が一変しました。自粛生活がデジタル化を加速させ、オンライン会議や授業、テレワークが一時的なものではなく普通の生活となるのが想定されます。

今後、住まいには、家庭空間の中に仕事や学習空間が必要となり、従来のB+LDKから変わることも容易に想像されます。その影響により、リノベーションの需要が益々増加し、インテリアに関してより高度の知識が求められます。更にインフラ・ネット社会に関するより幅広い知識・想像力が求められるでしょう。

今年は五年ですから焦らずに、しっかりと知識を深めて、社会のニーズを見逃さず、皆で前向きに歩んでいきましょう。



いただきました。会社の角印を彫られていたり、大きな印面に挑戦されたりとそれぞれに楽しんでおられました。

一緒に参加した孫娘は「手直しなし」で非常に喜んでいました。私とはえらい違いでしたが、楽しい時間を共有できました。

(記・川野 京子)

OISの回想録 (5) 梅田さんの思い出 顧問 疋田 友一

梅田さんとは榊高島屋工作所時代から社名変更後の高島屋スペースクリエイティブで同僚として長い付き合いがありました。仕事以外でも四国八十八か所巡りやカニのシーズンには毎年久美浜や網野方面へ美味しいお酒を飲みながらカニのフルコースを味わったり、豪商の旧三上家住宅、ちりめん街道の旧尾藤家住宅や稲葉本家の見学、豊岡のクワノトリの郷公園や余部鉄橋、鳥取県三朝町の日本一危険な国宝といわれる三徳山三佛寺「投入堂」への命がけの登山、岡山県備前市の楷の木が真っ赤に紅葉した旧閑谷学校、福知山市にある伊勢神宮より古い元伊勢神宮、伊根の舟屋など、社員や協力会者のメンバーと共に多くの名所を巡りました。このような企画は常に梅田さんが率先して計画してくれたものです。

歩く速さは人より数倍速く、頭の回転も速く雄弁な人でした。しかし、次第に手足が自分の意思で動かさなくなる難病にかかり、一緒に旅行することも出来なくなりました。

梅田さんは、私より早くにインテリア設計士1級の資格を取得していて、梅田さんに資格を取るよう勧められ、私も挑戦しOISの会員になりました。そのおかげでOISの理事になり、会長まで勤め上げることが出来たのです。梅田さんはOISの行事に積極的に参加し、いろいろ企画されていたので、私が会長の時、梅田さんに理事になるよう勧めましたが、理事にするなら退会すると言ってなかなか良い返事がもらえませんでした。そして平成15年(2003年)にやっと理事になることを承諾してもらえたのでした。



梅田澄徳さんを偲んで

長く闘病中であつた梅田前会長が1月5日に亡くなりました。ご冥福をお祈り申し上げます。(享年 74 歳)【OIS 会員一同】

あまりにも早すぎないですか？

いつも自然体で色々なうんちくをまき散らせてそれでいて皆に愛されていた梅田さん、残念でなりません。

もっともっと話を聞かせて頂きたかった。もっともっと楽しいお酒を一緒に飲みたかった。これからという時に梅田さんも本当に悔しかったと思います。お疲れ様でした、ゆっくりと休んでください。(河野 洋二)

いつも凜としていて、曲がったことがお嫌いで、また、私たちの質問にも丁寧に指導くださいました。これまでに数々の仕事をこなすことが出来たのも、そのおかげだと感謝しています。体調をこわされてからは、あまりお目にかかることが出来ませんでした。陶芸教室やトークパルでにぎやかに過ごしたことは、忘れがたい思い出となりました。ありがとうございました。(南野 江以子)

梅田さんは仕事、有意義な遊び(社会見学)、とにかく何事にも真剣に取り組まれ、追及され、楽しまれ、シャイな反面愛情が深く、さりげない大きな優しさを兼ね備えられた方でした。理事会帰りの度、終点の駅手前の駅までずっと一緒に電車内では、これからの「OISの希望」やたくさんのお話を語り合いました。多くのことを学ばせていただき、青年部との夢も語り合ったり…。奥様への愛情もとても深い方でした。私が舞鶴在住中にも、宮津に疋田さんなどと遊びに来てくださったりと…思い出は尽きません。これからの設計士協会を支えて下さるべく貴重な存在であつた方かと。梅田さん、天国では思い切り自由にたくさん楽しんでください。ありがとうございました。(山口 一芽)

会社での梅田さんの専門分野は特に建築造作の営業・見積・現場監理・協力会社との調整・調達・生産など幅広くかかわっていたので、正にインテリア設計士1級としての知識の豊富さは素晴らしいものでした。そのため、前回OISの回想録(4)で取り上げた「インテリアスーパーバイザー」の講座では、施工図面を見て見積もりの拾い出しと見積書の作成や現場監理の基本・墨出しの仕方・現場工程表の作成などを講師として担当。理事になられた平成15年の第1回インテリア・家具講座でも講師として、インテリア材料や食堂用椅子の断面が分かる現物サンプルを協力業者に作らせて持ち込み、その構造を分かりやすく説明。平成20年には、4年がかりで集めた60種以上もある貴重な突板を持参し、参加者に名刺サイズにカットさせて、突板見本帳を作成する講習会をされ、木材の特徴など詳細に解説されました。また、集めた木の葉を見せて、この木の名前は何かと問うたりして、葉の特徴から木の名前を当てるなど、木材について豊富な知識を持っておられました。SJITのインテリア設計士テキスト<学科編>の編集の時も、編集委員として建築・インテリア材料全般の資料を詳細にまとめてくれました。

第2回目の回想録で紹介した陶芸教室では、率先して陶芸終了後の親睦会のアウトドアパーティーの食事で焼き鳥などの段取りを前日から自宅で用意をし、当日現地で焼いてくれたりし、その他いろいろな親睦会においても力を惜しまない性格でした。

そして、平成25年には宮後会長の後任としてOISの会長となり、SJITの監事にも就任され、OIS及びSJITでの活躍を期待していたのですが、体調の悪化で任期半ばにして河野会長に引き継ぐことになりました。

この度、梅田さんの突然の訃報に驚き、前述したような積極的な性格と豊富な知識・経験・技術・広い人脈を持った貴重な人材を亡くし、誠に残念な気持ちでいっぱいです。

皆さんと共に梅田澄徳さんのご冥福を心からお祈りいたします。

かつて吹田市の西尾家住宅の見学に行った際、案内ボランティアの方が茶室に使われている材木について「これは何かご存知ですか？」と我々に質問されました。本当はその方が説明をしたかったのだと思いますが、相手が悪かった(笑)。

「これは黒柿でっしゃろ！」それで止まりません。訊かれてもないのにこれは〇〇で、これは××と次から次へと言い当てていく梅田さん。「案内人さんの仕事取ったらあきませんよ！」と爆笑しながら見ていましたが、まさに「プロ」のなせる技に感動しました。

長年お勤めの会社を定年退職され、「これからイナゴライダーやで(給料が175,000円にされてしまう)！」とお笑いになりながら、実績を買われて嘱託勤務を続けられました。そしてOISの会長に就任され、私生活でも悠々自適な生活がまさにこれからという時に病を得られました。これだけ真面目に働いてきて、みんなにも慕われ期待される人なのに、どうして…と我々も運命を呪いました。

梅田さん、これからもOISを見守り続けてください、などとお願ひしたら安らかに眠れませんか？安心していただけるように、我々もがんばります。本当にお疲れ様でした。(瀬 部 明)

最初の印象は白髪のパボカット、博士のような雰囲気とつつきにくい感じでした。陶芸教室で焼き鳥を用意したとき、出来合いのものを焼くのではなく、鶏肉から購入、あらかじめ自宅で用意し、現場で串打ち、手間がかかりますが、安くておいしいのです。このひと手間を惜しまない人が梅田さんです。

本部総会(神戸)の時、はじめての子供ができた私にカンパを募ってくださいましたね。最後に参加された仙台総会では、小長谷さんと3人同じ部屋で、いろいろ話しましたね。懐に飛び込むと思ひやりがあり、たくさん助けていただきました。

OISの会長に選ばれ、これからという時に難病にかかり、本人が一番辛かったと思います。ゆっくりお休みください。(岡崎 正明)

家具よもやま話 No.9 小長谷 光

前回に続きミニチェアの話です。「脚物」に、おもしろい製作過程と工具があつたのでご紹介します。

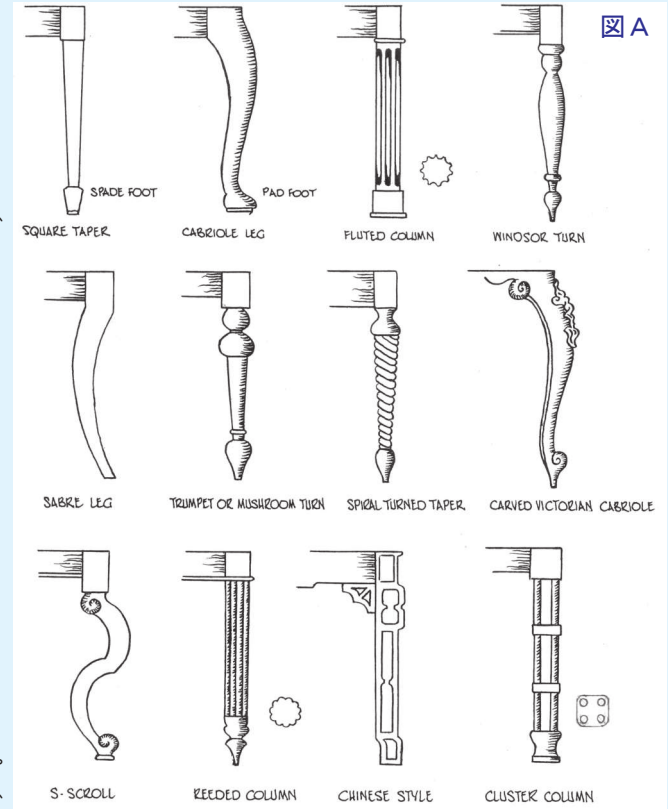
図Aは、椅子の前脚部の形状と呼称一覧です。すべてとは言えませんが、かなりの様式が揃っていると思います。

写真①は、ハート形の背もたれを持つヘッブルホホワイト様式の肘掛け椅子を保持機能付きのピンセットで挟んでいます。写真を撮るためとは思いますが、この状態では力のかかる加工はできません。しかし、ピンセットを汚さぬよう養生すれば塗装するには便利でしょう。この脚先の形状は、図A上段左端のSQUARE TAPERそのものです。この様式の家具はマホガニーが主で縮尺は、写り込んでいるボールペンから推測すると1/12と思われるます。

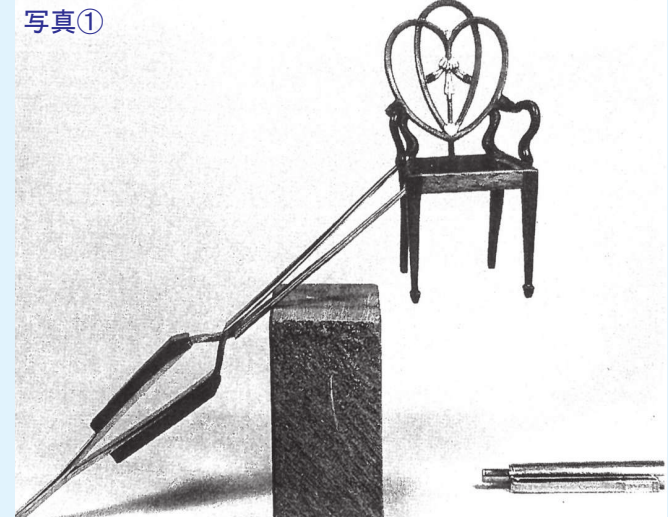
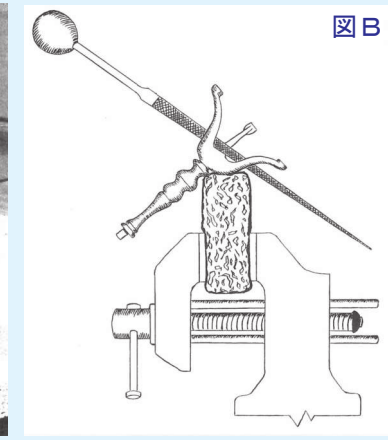
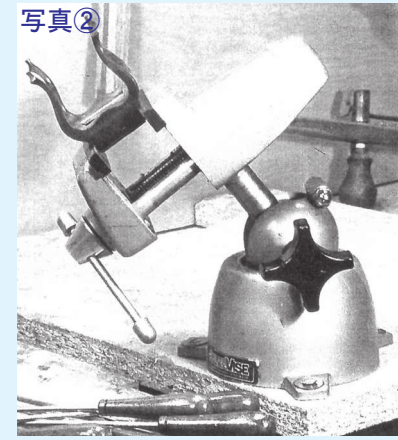
写真②は、パナバイスという角度が自在に固定できる万力で、テーブルのものと思われるガブリオールレッグ(図A中段右端参照)を固定しています。角度が自在になるのでヤスリがけなどは楽にできるでしょう。

図Bは、同じくバイスの使用例ですが、ここでは作品を固定するのではなくコルクブロックをバイスに挟み、傷付けぬよう作品を手持ちでこれに当て細いヤスリで繊細なアール加工をする様子です。

写真③は椅子ではありませんが、ガブリオールレッグのライティングビューローの組み立てをしているところです。接着剤が固着するまで締め付けている金具(端金)に注目してください。実物の家具製作でもミニチュアでも幅の広い物の締め付けに端金は大変便利で、西洋式のGクランプやクイックアクションクランプでは重すぎて適当ではないため、外国でも重宝され、日本語のHatacame clampで通っています。この写真ではミニチュアなので締め付ける力が弱いからでしょうか、当て木をしていませんが、実物の家具であれば端金の跡が残らぬよう当て木をするはずですよ。



余談ですが、前回オランダ風のビューローをダッチビューローとしたのは、出典書籍が今回と同じで、著者がイギリス人ゆえにそう判断し、以前触れたアメリカのペンシルバニアダッチは、ドイツ系やスイスのメノー派という移民の様式を指し、同じダッチでも歴史が違いますので、補足させていただきます。もう一つ余談ですが、私はミニチェアの話や模型を作ったりするときよく思い出すのは「飛べ! フェニックス」(1965年)というアメリカ映画(ロバート・アルドリッチ監督)です。双発の飛行機が砂漠に不時着し大破するのですが、生き残った機長(ジェームズ・スチュアート)と何人かの乗客が片方のエンジンと翼などの修理できそうな残骸を組み合わせて単発機を作り脱出するというストーリーです。その音頭をとるのが自称飛行機の設計者(ハーディ・クリュガー)ですが、完成寸前になって彼は、実は飛行機「模型」の設計者だと判り、一同奈落の底に突き落とされます。ここで彼曰く、「模型の方が人が操縦しない分緻密に設計しなければならぬ。」とは荒唐無稽な話の



なかで「なるほど」と思ったものでした。ミニチェアも同じで、小さく縮尺されているので、僅かな誤差も大きなものだとつくづく考えさせられるところですよ。

